

CAGLIERO

カリエロ11 サレジオ会
宣教ニュース

N.143 - 2020年11月



サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信

宣教活動は、今日も意味があるのでしょうか？

宣教顧問 アルフレド・マラヴィジャ神父 SDB

1875年11月11日、木曜日、ヴァルドッコの扶助者聖母大聖堂でのことです。夕の祈りとマニフィカトを歌い終えた後で、ドン・ボスコは説教壇に上り、出発する宣教師たちの使徒的計画の概要を語りました：イタリア系移民の福音化から始め、パタゴニアの福音宣教を目指すこと。そしてドン・ボスコは、預言的な言葉で話を締めくくりました：「……誰が前もってわかるでしょうか、この出発から、この小さな種から、大きな植物が育つかも知れません。たとえキビやかやし種の小さな種粒であったとしても、少しずつ広がり、やがて多大な善を生み出すかも知れません。」それからドン・ボスコは宣教師たちを一人ひとり抱擁しました。ある旅の帰途、自ら鉛筆で帳面にしたためた「最初の宣教師への勧告」が、一人ひとりに与えられました。ドン・ボスコはジェノバまで行き宣教師たちを見送りました。宣教師たちは11月14日、フランスの蒸気船サヴォワ号に搭乗しました。ドン・ボスコは涙をこらえようとして顔が真っ赤になっていたと、ある人は証言しています。



しばしばドラマチックに語られるこの場面は、私たちサレジオ会員の間に夢をかき立ててきました。しかし今日、多くの人の内に問いもあります：今日でも、宣教活動は意味があるのだろうか？ 自分たちの管区にも十分会員がいないのに、なぜほかの国に会員を宣教師として送るのか？

神はすべての人が救われることを望んでおられるので、すべての人にイエス・キリストを知る権利があります。そのため、イエスを知る可能性が、具体的な形ですべての人に開かれていなければなりません。実際、弟子は皆、いつでも、どこでも、福音を宣べ伝えるよう命じられているのです（マタイ28・19-20）。「キリストの計り知れない富」（エフェソ3・8）を、すべての人が見いだすためです。一方、かつてと同様、今日も、多くの人がイエスを知らず、イエスを知り、受け入れる機会もないのです。そのため教会は、これまでも増して今日、「前進する」よう呼ばれています。かつての宣教師たちを触発した聖霊の声に聞き従う同じ心がまえをもって、同じ宣教の熱意と勇気に燃え立って（『救い主の使命』30；『福音の喜び』24）。

サレジオの召命は、私たちが教会の中心部に据え（会憲第6条）ます。教会は「その性質上、宣教者である」（第二バチカン公会議文書、教会の宣教活動に関する教令2）、なぜなら「諸国民のもとへ派遣され」（同1）ているからです。ドン・ボスコは、所属する小教区を持たない貧しく見捨てられた若者のため、宣教の視点をもってオラトリオを生み出しました。宣教の熱意に駆り立てられたドン・ボスコは、そのほか、印刷所、「カトリック講話集」、ボレッティーノ・サレジアノなどの取り組みを立ち上げ、サレジオ修道会、FMA、サレジアニ・コオペラトーリ、ADMAを創立しました。そしてついに、1875年にサレジオ会宣教師、1877年にFMAの宣教師を派遣することによって、若い修道会に全く新たなページを開いたのです。ドン・ボスコは自らの修道家族にこの宣教の情熱を伝えました。そのため、サレジオ会の第19回、第20回総会は、宣教への取り組みが私たちの会の本質と目的の一環を成すことを強調したのです（GC19, 178; GC20, 471）。したがって宣教師は、管区の多くの会員の中の余った人材なのではありません。また、「ここに会員が必要だから」という理由で管区に会員をとどめるのでもありません。サレジオ会宣教師は、サレジオ会召命の中の宣教師の召命に応える会員です。実に、毎年、宣教派遣は、ドン・ボスコの宣教精神とその取り組みへの、私たちの忠実の具体的な表現なのです！

振り返りと分かち合いのために

- 宣教活動は、なぜ今日も意味があるのでしょうか？
- なぜ宣教師の召命は、私たちに共通するサレジオ会召命の中の、さらなる呼びかけなのでしょう？

1920年、ちょうど100年前、ドン・ボスコの二代目後継者アルベラ神父は、ヨーロッパのサレジオ会管区長たちにあてて ad gentes 諸国の民への宣教の情熱を喚起する、熱意あふれる手紙を書きました。アルベラ神父は書いています。すでに今、ドン・ボスコが1883年8月30日に見た素晴らしい夢が実現に向かっていくように思われる、と。天使のような若者ルイジ・コッレ（聖性の香りのうちにその数年前に亡くなっていた）は不思議な仕方で、サレジオ会が将来達成しなければならない遠大な目標をドン・ボスコに示しました。「何千もの、何百万もの人々が、あなたの方の助けを、信仰が伝えられるのを待っています。」その後、ほかの夢も続きました。サレジオ会員が世界中で靈魂の世話をする様子が徐々に展開するのを、若者の友である聖人は見ました。アルベラ神父は続けます。「しかし残念ながら、神なる師の嘆きが、私の心の底からも発せられます：『Messis quidem finto operarari autem pauci.』（収穫は多いが、働き手は少ない）。」アルベラ神父は、サレジオ会事業の莫大な収穫のために福音宣教の奉仕者が差し迫って必要であることを述べます。そして惜みない心で宣教に献身するよう招きます：「どこでも私たちの宣教地のあるところへ管区が送る宣教師の数が多ければ多いほど、主がその管区にくださる修道召命は、数多く、優れたものになるでしょう。これは単なる美しい言葉ではありません。尊者である私たちの父のまことの考えなのです。」これは確かに、過去のメッセージなどではありません。今日私たちは、これまでにも増して、サレジオ会員、サレジオ家族のメンバーとして、この言葉を信じ、最も遠くにいるように思われる人々の必要に、心を閉ざしてはならないのです。「ドン・ボスコの最も美しい記念、その大いなる使徒の心に最もふさわしいのは、新たな人々を勝ち取り信仰と文明へ導くため、十字架と福音を手にし、出かけて行く宣教師ではないでしょうか。」



（長上評議会報2, 26-33）

神はすべての文化の中にまことにおられる



私はキリスト教の家庭で、宗教的、政治的に多様な環境で育ちました。その環境は、すべての若者の運命に影響を与えました。私は教会の活動に参加しました。中学・高校のころの活動を通して、自分の中の宣教師への呼びかけが明らかになってきました。霊的指導者に助けられながら耳を傾けるうちに、主が心の中で、そして遠くから、私を呼んでおられることがはっきりしていきました。そのときから、自分の心に生まれるどのような望みも、宣教への熱意というレンズを通して眺めるようになりました。

私は中国で働くサレジオ会宣教師として、自分のものとは違う異文化を前にしています。中国語で意思疎通する苦痛は、私のユーモアのセンスを脅かしています。人間関係を形作る序列的な社会構造と権威のあり方も、私が葛藤をおぼえるもう一つの挑戦です。それは人間の尊厳を社会的地位や人種的背景によって計る危険があることを意味します。このような状況に、召命を得た若い人がやって来た場合、召命が揺らぐことに苦しむかもしれません。なぜならこの文化の現実を、修道者としての生活に当てはめるのは難しいからです。

今日の中国は、かつてないほど社会的な緊張が高まっています。私たちの修道共同体は、党派的な政治に関わることがないように最大限注意しながら、祈りと識別によってこの状況に対応しています。この現実を前に、私の修道生活、特に共同体的な側面は大きな挑戦に直面しています。私たちは最近、新型コロナウイルスの打撃を受けました。人の命が脅かされ、多くの宗教的、社会的活動が停止に追い込まれました。皆が恐れの中に、未知のものへの不安のうちに日々を送っています。こういった困難は私の宣教師としての歩みの物語を書き換え、私たちの共同体の生き方に影響を与えています。若者たちも影響を免れません。喜びいっぱい若々しい活力に満ちて生きることを制限されています。こういったことすべてを見ると、この物語を綴っているのは神の指なのだろうかとは心の中で問います。



このすべてにもかかわらず、私はこれまでを振り返り、なお喜ぶ理由を見つけることができます。神の似姿の見事なモザイクを織りなす、人のいのち・人生の多様性を、そして神が一人ひとりの物語、一つひとつの出来事のうちにご自身を顕されることを、私は理解し喜ぶことができました。神は本当に、すべての文化の中におられます。神は若者たちの中におられます、その声がどれほど小さなささやきであっても。ここで、生きることを分かち合った若者たちの人生のうちに、私自身、その声を聞きました。それが私の最も深い喜びです。若者たちのうちに見いだすこの喜びが、あらゆる困難の中で私の力になります。私はこういった挑戦や喜びを祈りの中で神のもとに運び、また共同体と分かち合います。祈りの中で、神はみ旨を直接明かしてください；共同体と分かち合う中で、神は兄弟たちを通してみ旨を明かしてください。

結論として、宣教師の召命を識別している会員は、呼んでおられるイエスの声をすでに聞いているのではないかと思います。その人たちは、心を開いて恐れることなく聞き従おうとしているので幸せです。その道で困難に出会うでしょうが、神の唯一無二の宣教者、イエス・キリストのうちに力を見いだすでしょう。若者の救いのための唯一の使命を私たちが分かち合う、この方のうちに。

中国の宣教師 ニコラス・チブエゼ



尊者マンマ・マルゲリータ (1788 - 1856) は、サレジオのカリスマに、女性らしい母

としての存在によって、その始まりのときから、サレジオのカリスマに独自の影響を与えました。ジョヴァンニーノの家族は父親を失うという痛手を受けましたが、子どもたちのために自らを全面的にささげた母の深い愛を享受できました。子どもたちにとり、最初の、そして最も重要なカテキスタ；責任感のある、良く働く正直な、より貧しい人に愛を示す人になるよう教えた女性でした。ヴァルドッコに移ってからドン・ボスコを助けて、貧しく、家族のいない若者を支援しました。母の愛情と強い女性の知恵をもって、良いキリスト者、誠実な社会人となるよう、若者たちを教育しました。

サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 ピエルルイジ・カメローニ神父

サレジオの高等教育機関のために



サレジオ会の宣教の意向

サレジオの高等教育機関が、科学を人間に仕えるものとし、促進しますように。

世界で、サレジオの高等教育機関の数は増えています。それらの教育機関が、キリスト教的ヒューマニズムあふれるサレジオのアイデンティティを保つことができるよう、祈りましょう。真理、神の造られた世界、人間の尊厳を擁護し社会に貢献する、男性、女性を育成することができますように。



Cagliari 11 (カリエロ11)の全バックナンバー : <http://salesians.jp/library/cariero>